＜祈祷会の御言葉から＞

村上定幸

【出来ること】教団のある教会の 50 年誌に、こんな“まえがき”のあることが、まず話題になりました。“デキル時に、デキル人が、デキルことを”と私たちは考えるが、出来る時にも、出来る人がいても、出来ることがあっても“しない”のだというのです。忘れたくない現実だと思います。そしてこのことは、本人にとっても、すなわち“おそらく自分はそんな指摘を受けるだろう”と思う人にも、他の兄姉を見ていても“なにか事情があるのだろう”とか、“だから自分も許される”と思ってしまうものでしょう。週報に書きましたが、働きは個人から始まることは知っていてもです。

【悲しみなさい】祈祷会で開かれた聖書箇所は、ヤコブ書４：８～９です。“神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます。罪人たち、手を清めなさい。心の定まらない者たち、心を清めなさい。悲しみ、嘆き、泣きなさい。笑いを悲しみに変え、喜びを愁いに変えなさい”とあるところです。聖書では、笑いや喜び、悲しみってどんな意味に使われているのでしょうか。ごく普通に感じられる意味でしょうか。ピリピ書４：４には“主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい”とありますが、これなどは暗記している兄姉も多いと思います。喜び、あるいは平安という言葉の方を私たちは好みますし、聖書そのものは救いの喜びの契約の書物ですから、神様からの手紙のように読みたいものです。その中に“悲しみ嘆きなさい”とあるのを呼んで、裁きの書のように読める時があるかもしれません。

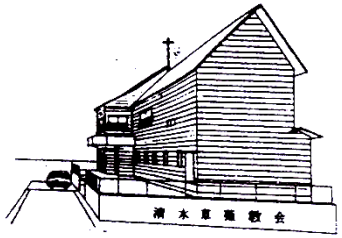
【主にあって】“喜びと悲しみのキーワード”は“主にあって”ということでしょう。そしてここでは、神様との距離を強調しているのです。神様に近いことは、最高の喜びでしょう。ですから、離れているということは、救いから遠く、あるいは、救いとは何の関係もない世界に生きる“苦痛”のことを聞きとるべきなのです。ところが、神から離れていることを忘れ、喜びや笑いを、空しく追い求める姿をヤコブは書いているのです。

【悲しみ】以前、“悲しみを知るクリスマスを”というクリスマス説教をしたのを思い出します。罪の世にあって、どんなに私たちは悲しみ、救い主の降誕を喜ばなければならないかを語った記憶があります。“悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる（マタイ５：４）”とありますが、この言葉によく聞きいっても、同じ神の声が聞こえると思います。

【ですから】“出来る人がしない、出来ることをしない、出来る時にしない”ということを、神様と教会からの距離でみましょう。もったいないから何もしないとか、“自分がしなくても”などと思ったら、笑おうが、また悲しもうが神様からずいぶん離れたところで、あえいでいる姿を現しているようです。この神様から離れていることを絶対に忘れないために、私たちは、信仰を告白し続け、懺悔の祈りをささげるのです。

週　報

２０１１年　８月　１４日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042